

Title	阪大小児科大研
Author(s)	井上, 雅美
Citation	癌と人. 24 P.29-P.30
Issue Date	1997-03-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/23949
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

阪大小児科大研

井上雅美*

1987年秋某日、私は大阪大学小児科の河敬世先生（現大阪府立母子保健総合医療センター小児内科部長）との面談の時間に遅れまいと、緊張して冷たくなった手をこすりながら急ぎ足でJR環状線福島駅から阪大へ向かっていました。この日、河先生の研究グループに加えていただくをお願いすることになっていたのです。

当時、河先生のグループは白血病や神経芽腫などの悪性腫瘍を中心に診療されており、阪大ではじめて骨髄移植を治療法として導入し、研究面ではサザン法という遺伝子（DNA）を解析する手法を駆使して腫瘍細胞の性質を次々に明らかにし、その成果を発表されていました。阪大に数多くある研究グループの中でも最もactivityの高いグループの一つでした。

河先生は、面談の間、グループの活動状況や今後の研究テーマとして考えておられることを淡々と語られましたがその内容は非常に高度なものでした。市民病院に勤務していた私にとっては自分の勉強不足を再認識させられるとともに、闘志が湧いてきたのを覚えています。面談の終了間際に、私は気負って「河先生の子分として一生懸命頑張りますのでよろしくお願ひします。」と挨拶しました。しかし河先生の反応は冷静なもので、「自分は、子分はいらない。グループのメンバーとして対等に議論できるような人材を必要としている。」という内容でした。この言葉は当時の私にとってはカルチャーショックに近いものでしたが、その後様々な場面で、河先生のこの言葉を思い出す経験することになりました。

さて、幸運にもこの翌年の夏に研究生としてグループに加わることになり、最初の1年間は病棟係として仕事をしました。重症患児が多く、次々と移植治療を行うために病棟に泊まり込むことも多くハードな毎日でしたが、それまで経験したことのない治療に携われる喜びの方が勝っており、苦痛を感じることはありませんでした。この病棟での1年間の生活を終えていよいよ研究室で実験をすることになったのです。

大研（大研究室の略か？）と呼ばれるその研究室は旧阪大病院の8階の奥まったところがありました。大研とはいえ勉強のための机もないほどに実験用試薬・器具・機器が所狭しと並んでおり、先輩たちは場所の取り合いをしながら実験をしている状況でした。それまでピペットもさわったことのない私はただただ呆然と立ちすくんでいるだけでした。また、このように雑然とした研究室から世界的な論文がいくつも出されているということも驚きでした。その後、一人で実験ができるようになるまでの数々の失敗や試行錯誤は文字にはできないものですが、暖かく見守って下さった諸先輩がたには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。当時導入されて間もない実験法であるPCR（特定の遺伝子を増幅する手法）がなかなかうまくいかなくて、誰もいない夜中を選んで、泣きたいような気持ちで連日徹夜で実験をしたことも今となってはなつかしい思い出です。

また、勉強会やカンファレンスも新鮮なものでした。河先生はチーフとしての自分の意見や見解を押しつけることはせず、すべてのメン

* 大阪府立母子保健総合医療センター小児内科 平成7年度研究助成金交付者

バーが納得のいく最善と思われる結論がでるまで議論が続きました。患児の治療方針から研究方針に至るまですべてにおいてその姿勢は変わらず、現在に至っています。こうした議論を重ねることにより問題点が明瞭になり、勉強する意欲をかき立てられ、新しい発想も生まれやすく、今さらながら河先生の「子分はいらぬ。対等に議論できるような人材を必要としている。」という言葉のもつ意味をかみしめています。

近年骨髄移植は、移植2回法、抹消血幹細胞移植、臍帯血移植、選択的造血幹細胞による

HLA不一致移植などの拡がりをみせており、癌細胞特有の遺伝子異常に関する研究の進歩も著しく、癌治療・研究の最前線はホットな話題でいっぱいです。しかし、これらの治療・研究に携わる意気盛んな医師・研究者が必ずしも研究費や環境に恵まれているとは限りません。自分自身の医学者としての出発点があつたことを思い起こしながら、研究費をいただいた癌研究会に感謝するとともに、今後も研究に携わる人々をこれまでどおり援助していただくようお願いする次第です。

ガンの危険信号 八か条

1. 胃ガン……胸やけや胃のもたれなど、胃のぐあいが悪くないか食べ物の好みが変わったりしないか
2. 食道ガン……食べ物や水を飲みこむときに胸につかえる感じがしないか
3. 結腸ガン、直腸ガン……便秘と下痢をくり返していないか便に血液や粘膜が混じったりしないか
4. 肺ガン、喉頭ガン……せきが長引いたり、たんに血が混じったりしていないか
5. 舌ガン、皮膚ガン……治りにくいできもの、潰瘍がからだのどこかにないか
6. 子宮ガン……おりものが出たり、不正性器出血がないか
7. 乳ガン……乳房のなかにしこりが触れることはないか
8. 腎ガン、膀胱ガン、前立腺ガン……尿の出が悪くなったり、尿に血液が混じったりしないか

— 日本対ガン協会制定 —